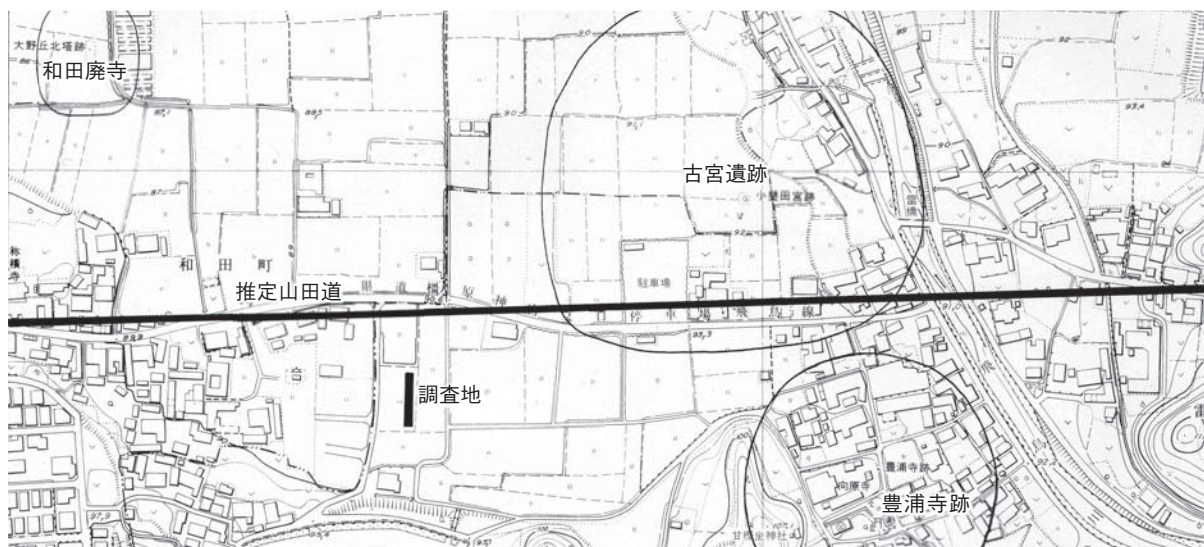


藤原京左京十二条一坊出土の石釧

高橋 幸治

I. はじめに

発掘調査によって得られる考古資料のうち、動く「モノ」（動産）を遺物、動かない「モノ」（不動産）を遺構と呼び、これらの有機的な関連性の総体をまとめて遺跡と呼ぶといった定義は、現在の考古学研究法により明確にされている¹⁾。不動産としての遺構が基本的には移動しないのに対し、動産としての遺物は後世の様々な要因により、移動してしまう。このような属性から、考古資料は、「第一等資料、第二等資料、第三等資料、等外資料」といった区分がなされる²⁾。この定義によれば、「第一等資料」は、出土した遺跡が明らかであり、どのような遺構からこういった状態で出土しているのかが確実、かつ明らかなものを指す。いわば出土遺物が、その所属する時代の遺構との関係において原位置を保っていると認識された考古資料とって良い。これは、基本的に出土した「モノ」と「モノ」との関係性を追求することによって明らかにできることであり、発掘調査とは、この関係性を追求し、検討し、その妥当性を記録していく行為とってよいかもしれない。検討する材料として時間的位置づけと空間的位置づけが明確にされ、それぞれの関係性が明らかにできた状態にある資料ともいえる。これに対し、「第二等資料」とは、遺跡からの出土ではあるものの、遺構に伴っていない状態での出土、例えば包含層からの出土、明らかにその「モノ」が所属する時代の「モノ」とは異なる「モノ」と共伴した状態での出土、あるいは単独で出土した資料などを指す。「第三等資料」は出土地などが不明ではあるものの、「モノ」そのものが本物の資料であることを認識できるといった程度の、遺跡とは関係性が薄い状態である「モノ」を指す。今回取り上げる資料も、発掘調査によって得られた遺跡出土の「モノ」ではあるが、包含層からの出土であり、いわば「第二等資料」である。したがって、その考古学的な資料としての価値は「第一等資料」よりはさがる。しかしながら問題提起として、資料に如何なる史的意義を与えられるのか、その可能性を探る材料として藤原京左京十二条一坊出土の石釧を取り上げた。



第1図 石釧出土調査地位置図（1：5000）

II. 石釧出土遺跡の周辺環境と調査の概要

当資料が出土した発掘調査は2015年度、個人住宅建設に伴って行った。調査区は、幅4m、長さ35mで設定している。調査面積は約140㎡。この調査区のうち、南側付近、遺構検出面より上方約20cmの包含層中から石釧が出土した。明日香村内では古墳出土資料も含めて初出である。

この石釧が出土した遺跡は、高市郡明日香村大字豊浦に所在する。飛鳥川西岸、甘樫丘から延びる丘陵北側にある豊浦寺跡から西へ約300m、古代の幹線道山田道は北側約50mで東西方向に推定される。古墳時代の遺物が大量に出土している和田廃寺は北西へ180～300m。かつて小墾田宮推定地とされた古宮遺跡は、東北東に200～250mの距離にあり、調査地周辺遺跡の中では比較的遺構密度が高い³⁾。調査地は藤原京の条坊でいう左京十二条一坊にあたり、藤原京関連の遺構検出が見込まれていた。南西の藤原京右京十二条一坊では橿原市教委によって発掘調査が行われ、弥生時代、奈良時代、平安時代の遺構が検出されており、調査地周辺は古くから居住域として土地利用がなされていた可能性がある。

調査地付近における近年の発掘調査として多くの成果が得られたのは、県道橿原神宮東口停車場飛鳥線敷設にともなった事前発掘調査であろう。その成果については順次報告書がまとめられ、内容が詳らかにされている⁴⁾。これらの発掘調査では、調査地近辺の地形的な特徴も明らかにされており、遺跡の立地が地形的な制約を受けていたとする見解を補強した。豊浦寺から西は、甘樫丘から延びる丘陵北縁部にあたり、周辺地形は標高でいえば、基本的に南東側が高く、北西へ向かって徐々に低くなる。したがって古宮遺跡付近を「扇の要」とした扇状地状の微地形が、東は飛鳥川の西岸から南は甘樫丘丘陵北端部にかけて広がりを持つというイメージを描くことができる。同時にこの扇状地状の地形は、いくつかの河川流路によってさらに細かく分断されている時期があった。調査地内で検出された河川あるいは遺構から出土した土器は、弥生時代終末期段階から古墳時代前期前半、古墳時代中期から後期の様相を示す。こうした遺構・遺物から、甘樫丘から延びる丘陵地周辺には、この時期の集落が営まれていたことが想定できるようになってきた。



第2図 調査区全景（南から）

墓域に関しては、これらの調査地北側において弥生時代終末期の、陸橋をもつ大型円形周溝墓を含む3基の周溝墓が確認され（奈文研2016）、同時期の集落遺跡と墓域を示す資料が新たに増加している。奈文研によるこの発掘調査は、本薬師寺の南、藤原京の条坊では右京九条二坊・三坊の地で行われた。当遺跡は弥生時代の瀬田遺跡でもあり、前述の弥生時代終末期から古墳時代前期前半の集落が付近に想定された左京十一条二坊・三坊などにおいて行われた調査との関連性が注目されるであろう。遺跡間の距離はおよそ500mである。

このように近年の発掘調査が行われる以前、当該地域における弥生時代終末期から古墳時代前期の遺跡は、検出数が少ないがゆえに様相が不明瞭であった⁵⁾

同じく飛鳥川を遡った明日香村内の当該期遺跡も詳

らかにされている遺跡は少ない。但し、明日香村内における飛鳥川流域の土器様相については、比較的早くから古式土師器による編年作業を行うにあたっての示準資料として、坂田寺跡下層出土の古式土師器が取り上げられていた。安達・木下によって、これらの土器群は古墳時代前期前半に位置づけられている。外面調整にミガキをともなう小型丸底壺は、その調整法をミガキから無調整あるいはケズリに変え、最終的にはハケによる壁面調整を行うという一連の技術的変遷の中に時期的変化を読み取ることができる。さらに細分化される可能性はあるものの、その変遷感については、変更の必要性がない。したがって、当該地域における古墳時代前期から中期にかけての土器編年は、安達・木下による編年を参照する⁶⁾。



第3図 石釧出土状況（南から）

Ⅲ. 資料の位置づけ

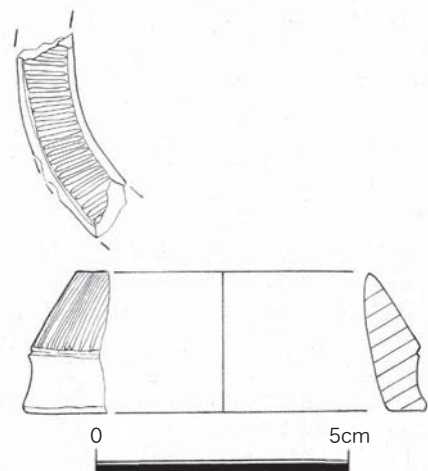
次に石釧の位置づけを検討したい。石釧とは古墳に副葬される腕輪形石製品のうちの一種で、鋏形石・車輪石とともに弥生時代後期から終末期にかけて製作されていた南島産貝製腕輪を祖型・形とした腕輪を模倣して製作された石製品とされる⁷⁾。その研究に関しては、これまでに多くの蓄積があり、古くは江戸時代まで遡る⁸⁾。古墳の副葬品としては大形の前方後円墳から中小の古墳まで副葬されるが、基本的に首長層が入手し所持していた品目である。集落においては、一般的な集落ではなく、首長居館や物流の基点となるような拠点集落から出土する傾向がある（高橋 2003）。

本資料は完形品のおよそ六分の一のみ残存していた。斜面部の放射状肋条を線刻で表現する。側面部は横方向の凹帯であり、斜面部と側面部を画する横方向の刻線が一条めぐる。法量は、環体高 2.9cm、斜面高 1.6cm、側面高 1.3cm。環体底面幅は 0.8cm。錆化による変色が部分的に認められるが、内面部、底部、側面部は丁寧に磨かれており、本資料は最終研磨段階の完成品と考えてよい⁹⁾。

折損した破断面部分には研磨痕などがみられず、他の部位同様に風化が認められた。以上の観察結果は、本資料が製作されてから時を経ずして、程なく破損したことを示す¹⁰⁾。

石材は比重の高い緑色凝灰岩を使用しており、岩脈の葉理が顕著に認められる一群である¹¹⁾。この特徴的な石材は、現段階で福井県河和田遺跡とその周辺地域での生産が想定されており¹²⁾、当資料を製作した候補地の一つとして挙げられよう。

所属時期は、想定される同時期の共伴した遺物がな



第4図 出土石釧（2：3）

遺跡名	所在地	形式名	法量	遺存度	材質	出土遺構/層位	共伴遺物	備考
平城宮北方築地・第123-12次	奈良市佐紀町	車輪石	環体幅2.5cm・環体高0.7cm・側面高0.5cm 斜面高0.2cm	—	碧玉	築地SA03積土中	円筒埴輪	古墳が近辺に存在か。
平城宮東院地区・301次	奈良市法華寺町	石釧	—	約1/6~ 約1/7	淡青緑灰色凝灰岩	SD5200B 灰褐色土層	—	—
菅原東・第257-3次 (平城京右京三条三坊二坪)	奈良市菅原町	車輪石	環体幅6.2~6.7cm・環体高2.0cm・ 側面高0.9cm・斜面高1.1cm	約1/5	緑色凝灰岩	方形区画SX22周濠	ガラス小玉2・滑石小玉2・緑色凝灰岩未製品1	東海系・山陰系などの土師器出土。特に山陰系が多い。
菅原東・第257-2次 (平城京右京三条三坊七坪)	奈良市菅原町	石釧	環体底面幅0.6cm・環体高1.4cm・ 側面高0.8cm・斜面高0.6cm	約1/4弱	緑色凝灰岩	溝SD04	管玉・古墳時代前期土師器	—
平城京右京五条四坊三坪	奈良市平松町	鍬形石	残存長8.2cm・残存環体幅2.0cm・ 残存環体高1.9cm	—	淡青緑色凝灰岩	土坑SK013	奈良時代土器	古墳が近辺に所在したことを想定。
柏木・第294次 (平城京左京五条一坊十三・十四)	奈良市柏木町	石釧	環体底面幅0.5cm・環体高1.5cm・ 側面高0.7cm・斜面高0.8cm	約1/4強	緑色凝灰岩	溝SD12	古墳時代前期土師器、朱付着石杵	古墳時代前期の遺構は搬入土器多い。
平等坊・岩室	天理市	鍬形石	残存長11.5cm・残存幅10.8cm	約1/2	緑色凝灰岩	土坑	布留式古~中相	土坑周辺には焼土、炭化材などを伴う土坑、土器集積遺構などあり。祭祀行為の場合。首長居館。
柳本立花	天理市	石釧	—	約1/4	緑色凝灰岩	古墳周濠埋土	前期前半土器	近辺に削平された古墳の可能性。銅鍬出土。
壱分宮/前	生駒市壱分町	車輪石	残存環体幅5.5~5.7cm・残存環体高1.6cm・ 残存側面高0.7cm・残存斜面高0.9cm	—	淡青緑色凝灰岩	溝SD01	庄内式土器・布留式土器・初期須恵器	近辺に居館を想定。石材は下永東城石釧と同一。
下永東城・第2次	磯城郡川西町下永	石釧	環体底面幅0.7cm・環体高1.4cm 側面高0.5cm・斜面高0.8cm	約1/4	淡青緑色凝灰岩	4号溝	古墳時代前期土師器	石材は壱分宮/前と同一。
唐古・鍵・第59次	磯城郡田原本町鍵	車輪石	—	—	—	—	—	—
纏向・第80次 (尾崎花地区)	桜井市巻野内小字尾崎花	石釧	環体底面幅0.5cm・側面高0.8cm 残存斜面高1.4cm	約1/5	淡灰緑色凝灰岩	落ち込みSX2001下層	布留0~2式期土師器	SX2001からは、下層~上層にかけて鍛冶関連資料が出土。
纏向・第54次 (穴師地区)	桜井市穴師小字トヨド	石釧	環体底面幅0.6cm・環体高1.6cm・ 側面高0.6cm・斜面高1.0cm	約1/6弱	—	遺物包含層	包含層中より管玉、焼成後穿孔の土師器	近くに祭祀遺構の存在を示唆。
上之庄・第4次	桜井市大字上之庄	車輪石	復元外径8.1cm・復元内径4.1~4.3cm 環体幅1.9~2.0cm・環体高0.7cm 側面高0.3cm・斜面高0.4cm	約5/6	滑石	溝SD1001	古墳前期土師器 緑色凝灰岩製管玉他	高杯・小型丸底壺が多い。
安倍寺下層 (知原地区)	桜井市阿倍	石釧	環体底面幅1.1cm・環体高1.9cm 側面高0.5cm・斜面高1.4cm	約1/4	碧玉	沼状遺構	古墳時代前期土師器	古墳前期の土坑、溝など検出。時期不明掘立柱建物あり。
安倍寺下層 (宮西地区・第2次)	桜井市阿部	石釧	環体底面幅1.0cm・環体高2.3cm 側面高1.1cm・斜面高1.2cm	約1/3	青緑灰色凝灰岩	1トレンチ	—	—
メスリ山古墳北斜面	桜井市	石釧	環体底面幅0.6cm・環体高1.0cm 側面高0.5cm・斜面高0.5cm	約1/6	淡緑色凝灰岩	6トレンチ	—	メスリ山古墳盗掘品か。
藤原宮大極殿 第20次	橿原市醍醐町	石釧	—	—	—	床土層	—	—
太田・第1次	葛城市	石釧	環体底面幅0.6cm・環体高1.9cm 側面高1.0cm・斜面高0.9cm	約1/5弱	淡青緑灰色凝灰岩	4トレンチ溝3	TK10・TK217段階の須恵器・土師器	河内・近江・山陰・東部ないし中部瀬戸内・東海などからの搬入土器(庄内~布留段階)あり。
・第1次		石釧	環体底面幅0.9cm・環体高2.2cm 側面高1.0cm・斜面高1.3cm	約1/8	—	5トレンチ土坑97	布留I(新)~II(古)段階の土師器	—
京奈和自動車道関連遺跡群(本馬地区)	御所市	石釧	残存幅2.3cm・環体高1.4cm・最大厚0.7cm	破片	緑色凝灰岩	B区第10トレンチ	包含層	近辺に古墳時代前期土坑あり。勾玉出土。
秋津・第3次	御所市	石釧	環体底面幅0.8cm・環体高2.1cm 側面高0.7cm・斜面高1.4cm	破片	緑色凝灰岩	竪穴住居3	—	方形区画施設検出。土師器・須恵器・製塩土器・多孔銅鍬・勾玉・白玉・双孔円板出土
・第3次		石釧	環体底面幅0.8cm・環体高2.1cm 側面高0.7cm・斜面高1.4cm	破片	緑色凝灰岩	竪穴住居4	—	—
越智・第3次	高市郡高取町越智	石釧	外径7.6cm・内径5.5cm・環体底面幅0.8cm・ 環体高1.6cm・側面高0.5cm・斜面高1.1cm	完形	緑色凝灰岩	大溝1	中世瓦器碗他	包含層出土の古式土師器は東海系・山陰系含む。
・第4次		石釧	環体底面幅0.6cm・環体高1.9cm・ 側面高0.9cm・斜面高1.0cm	約1/4	緑色凝灰岩	大溝1	同上	—
藤原京左京十二条一坊	高市郡明日香村	石釧	環体底面幅0.8cm・環体高1.6cm・ 側面高1.3cm・斜面高1.6cm	約1/6	緑色凝灰岩	包含層	—	—
平城京	奈良市	車輪石	環体幅4~5.6cm・環体高2.3cm・側面高0.5cm・ 斜面高1.8cm	約1/4	淡青緑灰色凝灰岩	Eトレンチ西区南北溝砂層	—	—
平城京左京五条七坊六坪(第258次)	奈良市	合子形石製品	口縁部長径7.9cm・短径6.0cm・底部残存 長径10.4cm・短径8.3cm・高さ5.4cm	約4/5	緑色凝灰岩	井戸SE03	13C前半遺物・円筒埴輪片13点	破壊された古墳が近辺に存在か。
纏向・第48次	桜井市大字辻	紡錘車形石製品	復元直径5.3cm・厚さ1.0cm・内孔径0.4cm	約1/3	碧玉質	—	—	—
纏向・第176次	桜井市	巴形石製品(未成品)	一辺4.3cm・厚さ0.9cm	ほぼ完形	緑色凝灰岩	3区SK-1006	布留0式期の土師器	製作していた可能性あり。
阿部丘陵遺跡群 第5地点(戸毛地区)	桜井市大字阿部小字戸毛	紡錘車形石製品	復元直径約5cm・厚さ1.1cm・内孔径0.4cm	約1/4	—	トレンチ内	—	土坑・石溝検出。奈良時代の土師器・須恵器出土。
河西遺跡	桜井市字浅古	紡錘車形石製品	復元直径5.0cm・厚さ1.5cm・内孔径0.8cm	約1/2	緑色凝灰岩	—	—	—
忍阪・第3次	桜井市大字忍阪	紡錘車形石製品	—	約1/4	緑色凝灰岩か	土坑SK02	土師器・須恵器・榛原石	コバルブルーのガラス製管玉表探。
鳥庄・第20次	高市郡明日香村	紡錘車形石製品	直径3.7cm・厚さ0.9cm・内孔径0.3cm	約4/5	滑石	包含層	—	近辺から布留1式期土師器出土。外来系土器あり。東海系・瀬戸内系。
向山 (笹々久保地点)	天理市柳本町	碎片・剥片	数mm~2cm程度	フィルムケ ~ス5本程	明緑灰色凝灰岩	落ち込みSX01	布留式段階土師器	石製品製作の工房か。
磯野北	大和高田市磯野北	白玉製作	—	—	滑石	竪穴住居	布留2式段階土師器	布留2式竪穴住居で製作。溝での祭祀、榎状木製品出土。

第1表 石製品集成表 2016年度版 奈良県内集落出土の腕輪形石製品および関連資料出土地一覧

いため、詳細については明らかにできない。参考として、前述した平等坊・岩室遺跡出土の鍬形石が同様の石材で製作されており、古墳時代前期後半とされる土器を伴って土坑から出土していることから、集落出土品の時期を判断する一つの目安にできる。この石材を使用して生産された腕輪形石製品のうち集落出土品としての時期的な上限とすることができよう。下限については、古墳出土品を参考としなければならないが、奈良県シメン坂1号墳に副葬された資料がある。この古墳は、その他にも土師器や玉類・鉄製品などが出土しており、古墳時代中期初頭に築かれた¹³⁾。よって当資料に関しても、古墳時代中期初頭の年代を下限にすることができよう。やや幅はあるが、当資料が製作されたのは古墳時代前期後半から中期初頭と考えたい。

IV. おわりに

以上出土した石釧について若干の検討を試みた。現段階での資料に対する評価をまとめると、この石釧は時期的に古墳時代前期後半から中期初頭に製作され、その生産地は福井県河和田遺跡周辺に求められる可能性がある。

もともと古墳副葬品であった可能性もあるが、近年集落出土品も増加している（第1表）ことから、共伴遺物をもたない当資料としては、どちらとも言いがたい。この点については周辺における遺跡の状況から推測するほかない。

石釧が製作された時期と同時期の遺物が出土した遺跡として、藤原京十一条朱雀大路想定地や和田廃寺などがある。前者では、僅かながら布留式期の単純時期とされる遺構が検出されており、大量に遺物が廃棄された落ち込みからは、初期須恵器や韓式系土器も出土した（樞考研2000）¹⁴⁾。後者は甘樫丘北側丘陵付近に立地する。主な調査として、布留式土器の段階に属する壺・甕・鉢・器台・高杯などが出土した溝を検出した調査（奈文研1975）、古墳時代の鉄斧・砥石・石製紡錘車・滑石製有孔円板や、土師器・須恵器などが多量に出土している調査（奈文研1976）、布留式を主体とした古墳時代土師器を含む多量の遺物が出土した旧流路があり、滑石製有孔円板が出土した調査などがある（奈文研1987）。こういった状況をみると、飛鳥時代以前の和田廃寺周辺を含めた当地における土地開発は、弥生時代終末期から古墳時代前期前半、古墳時代中期初頭、古墳時代中期から後期にかけてとみられる¹⁵⁾。

以上の検討により、今回取り上げた石釧の製作・流通時期は、古墳時代中期初頭に周辺遺跡との時期的重複が認められることから、この時期、当地にもたらされた可能性がある。主に首長層が掌握している文物であることから、その入手に関与できるクラスの人物が当地付近に拠点をもっていた可能性が浮かび上がる。5、6世紀には特筆すべき渡来系文物を携えて渡り来た人々による開発が、その後当地における蘇我氏の躍進に繋がる契機の一つとなったことは確かであろう¹⁶⁾。問題は、さらに遡る時期の遺跡をどう評価するのかである。前期古墳の空白地帯とされていた当調査地付近、あるいは飛鳥川をさらに遡った地点でも、前期古墳の副葬品などにみられるような品目が散見される状況は¹⁷⁾、こういったこれまでの歴史観に再検討の余地があることをしめす。当地にける弥生時代後期後半から古墳時代前期、中期、後期を通した土器編年の構築と共に、さらなる検討が進められるべき課題といえよう。調査地は、甘樫丘から延びた丘陵北側の縁辺部に当たる。現代の開発により、丘陵縁辺に所在した遺跡は、多くが削平されてしまった可能性が否めない。しかしながら、僅かな資料を丹念に拾い、つなぎあわせることで、明らかにできる歴史の一端があろう。

※表記上、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所は奈文研、奈良県立橿原考古学研究所は橿考研とした。明日香村教育委員会を村教委とした。各都道府県、市区町村の教育委員会は、奈良県教委、奈良市教委などのように略した。また奈文研の概報は『飛鳥・藤原概報 1』、橿考研の概報は『県概報 2000 年度』明日香村教委の概報は『村概報 -平成 12 年度-』などと表記した。

本文中における敬称は省略させて頂いた。ご容赦願いたい。

【註】

- 1) 例えば鈴木 1988 や勅使河原 2013 などがある。
- 2) 近代考古学の祖、濱田耕作が著した『通論考古学』には「(一) 第一等遺物 考古学者自ら発掘し、発掘地、共存遺物の明なるもの (二) 第二等遺物 発見地明確なるも、他の状態不明なるもの (三) 第三等遺物 発見地不明なるも、眞物たること疑なきもの (四) 等外遺物 眞偽不明なるもの」とある。この定義に関する意味付けは、小野山節が東大寺山古墳出土資料を事例として取り上げた (小野山 1985)。『通論考古学』の現代的意義については、同書復刻版の解題の中で角田文衛が詳述している (角田 1990)。
- 3) 古宮遺跡で検出されている古墳時代資料に竪穴建物 4 棟、土坑 2 基、井戸 2 基などがある。概報によれば、竪穴建物のうち SB162 にはカマドが敷設されていた (奈文研 1974)。
- 4) 報告書が刊行されている調査については、報告書を、概報が刊行されている調査については、概報を参照した。
- 5) 京の造営による開発で破壊されながらも、残された資料を丹念に拾い、蓄積させ、歴史叙述を展開しようとする試みは、当該地域における飛鳥・藤原京の時代以前における時代史を扱う際、最も基礎的かつ重要な作業になることは明白であろう。その試みとしては、以下の論考を参照させて頂いた (露口 2006)。また、それぞれの遺跡について、露口氏にご教示頂いた。記して謝意を申し上げたい。
- 6) 土器編年の構築は、森岡秀人・西村歩が「集落資料を限定された地域で時系列的に連鎖することがベストである。その前提には、間断なく良質な一括資料の蓄積があり、型式学的研究を多数の層位資料が支える状況が望まれる。」としている (森岡・西村 2006)。明日香村内では大きく飛鳥川流域と桧前川流域の土器を個別に検討するべきであろう。土器資料については飛鳥地域のみならず、檜隈地域においても韓系土器を含んだ、古墳時代の土器資料などが僅かながら蓄積されてきており (高橋 2015a、2015 b、2015 c、2016)、それら資料の一部については、若干の歴史的評価を見通的に述べたことがある (高橋 2013)。これらの土器群 (高橋 2012) については、その系譜を全羅道地域に求める見解 (亀田 2014) や、百済・馬韓系土器と土師器の折衷型式とする見解 (坂・中野 2016) などがある。合わせて参照願いたい。
- 7) 腕輪形石製品の祖型・形に関しては、様々な可能性を検討した (高橋 2008)。本稿では改めて述べないが、基本的な立場は変わっていない。
- 8) 近年の研究動向については、蒲原が詳しい (蒲原 2010)。
- 9) 石釧の製作工程に関しては、未成品も含めて若干の検討を試みたことがある (高橋 2000)。基本的に、型式間の差異は、製作工人集団の差異を示すものであろうとの解釈が導き出せる可能性をもつが、その前提となる基礎的な検討は容易ではない。
- 10) 集落出土資料は、そのほとんどが破片での出土であり、この点が古墳に副葬される事例とは異なる特徴の一つといえる (高橋 2003)。意図的に切断したことが観察できる事例として、平等坊・岩室遺跡土坑出土の鍬形石があり、葬送儀礼との関連性が指摘されている (青木 2010)。
- 11) この特徴的な石材は北條分類の材質 4 にあたる (北條 1994)。腕輪形石製品の型式学的研究における属性としての石材に関しては、これまでの研究に則した形でまとめた。型式学的研究の初期段階からその重要性は認識されていたと思われる (高橋 2011)。
- 12) 実際の資料は消失しているものの、検討した三浦に倣い (三浦 2007)、この地域を材質 4 の腕輪形石製品が製作された地域の一つとしておきたい。
- 13) 前期末葉に大量副葬された腕輪形石製品であるが、中期初頭にはその数を減少させ、一つの古墳につき一点のみ副葬される事例が散見される程度になる。副葬品としての役目を終え、やがては消滅する運命を辿る。
- 14) この調査地南側付近では、有孔円板や韓系土器が出土しており、和田廃寺の調査成果を考慮しつつ、現在の和田町集落周

辺と古墳時代集落とが重なりをもつことが指摘されている（榎考研 2000）。

- 15) 前述の調査地近辺における様相として古墳時代の墓域とその母集団が比較的隣接して検出されていることから、調査地南から南西にかけての丘陵頂部付近に中小の古墳が存在していた可能性は否定できないが、いずれにしてもこの時期から重要なエリアとなっていたことは明らかである。
- 16) 当地における開発は、蘇我氏によって活発に行われていたことがこれまでの研究により明らかである。古代において、池溝を含めた土地開発が、権力維持のための重要な要因であったことは周知の事実といえよう。こういった土地開発の一翼を担っていた渡来人の掌握のため、視覚的効果を狙ったものとして池を築いたとする説がある（青柳 2009）。
- 17) 例えば、いわゆる飛鳥京跡の発掘調査でも古墳時代前期の銅鏃などが出土している（榎考研 1992）。

【引用・参考文献】

- 青木勘時 2010 「天理市平等坊・岩室遺跡の楯形石出土土坑について」『古代学研究』第 187 号
- 青柳泰介 2009 「榎原地域の「渡来人」と蘇我氏」『季刊明日香風』第 109 号 飛鳥保存財団
- 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥・藤原京域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60 - 2
- 小栗明彦 2003 「古墳時代生駒谷の物流拠点」『古代近畿と物流の考古学』学生社
- 小栗明彦 2009 「古墳時代の生駒谷一竹林寺古墳と壺分宮ノ前遺跡の評価一」『ふるさと生駒一 30 周年記念誌一』生駒民俗会
- 小野山節 1985 「資料論」『岩波講座 日本考古学 1 研究の方法』岩波書店
- 榎考研 1989 『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 59 冊 野山遺跡群Ⅱ』
- 榎考研 1992 「明日香村 飛鳥京跡 一飛鳥京跡 123 ～ 126 次調査概報一」『県概報 1991 年度（第二分冊）』
- 榎考研 2000 「榎原市 藤原京十一條朱雀大路想定地 発掘調査概報（県道榎原神宮東口停車場線飛鳥線に伴う発掘調査Ⅰ）」『県概報 1999 年度（第三分冊）』
- 榎考研 2001 「榎原市 藤原京左京十一條一坊 発掘調査概報（県道榎原神宮東口停車場飛鳥線建設に伴う発掘調査Ⅱ）」『県概報 2000 年度（第三分冊）』
- 榎考研 2004 「藤原京右京十一條一坊」『県概報 2003 年（第二分冊）』
- 榎考研 2010 「秋津遺跡」『県概報 2009 年度（第三分冊）』
- 榎考研 2011 『藤原京右京十一條二坊・三坊 一県道榎原神宮東口停車場飛鳥線建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ 一 奈良県文化財調査報告書 第 145 集』
- 榎考研 2011 「秋津遺跡第 3 次調査」『県概報 2010 年度（第一分冊）』
- 榎考研 2013 『藤原京右京十一條三坊 一県道榎原神宮東口停車場飛鳥線建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ 一 奈良県文化財調査報告書 第 161 集』
- 榎考研 2015 『藤原京右京十一條二坊 一県道榎原神宮東口停車場飛鳥線建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅲ 一 奈良県文化財調査報告書 第 166 集』
- 亀田修一 2014 「百済と倭の交流一近年の調査・研究成果を中心に一」『百済と古代東アジア』第 60 回百済文化祭国際学術会議資料
- 蒲原宏行 2010 「腕輪形石製品研究の歩みと課題」『古代学研究』第 187 号
- 鈴木公雄 1988 『考古学入門』東京大学出版会
- 村教委 2018 『村概報 一平成 27 年度一』
- 高橋幸治 2000 「下永東城遺跡出土の石釧について」『榎原考古学研究所紀要 考古学論攷』第 23 冊
- 高橋幸治 2003 「集落出土の腕輪形石製品一和を中心に一」『新世紀の考古学 大塚初重先生喜寿記念論文集』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
- 高橋幸治 2005a 「第 3 章 1 号墳 第 4 節 出土遺物 2. 石製品」『史跡 雨の宮古墳群』鹿西町教委
- 高橋幸治 2005b 「島庄遺跡出土紡錘車形石製品の型式学的位置づけ」『飛鳥文化論攷 納谷守幸氏追悼論文集』
- 高橋幸治 2008 「下池山古墳出土石釧の位置づけ」『榎原考古学研究所研究成果 第 9 冊 下池山古墳の研究』榎考研
- 高橋幸治 2010 「腕輪形石製品の流通一集落出土品を中心に一」『古代学研究』第 187 号
- 高橋幸治 2011 「腕輪形石製品の石材と流通」『第 60 回 埋蔵文化財研究集会 石材の流通とその背景 一弥生～古墳時代を中心に一発表要旨集』第 60 回埋蔵文化財研究集会事務局

- 高橋幸治 2012 「(11)2010 - 3次 檜前遺跡群の調査」『村概報 -平成 22 年度-』村教委
- 高橋幸治 2013 「檜前大田遺跡の渡来系土器」『飛鳥京 明日香路小誌』VOL.38 秋冬号 飛鳥京観光協会
- 高橋幸治 2015a 「古墳時代 御園アリエ遺跡(2004 - 9・11 次調査)」『飛鳥資料館カタログ第 32 冊 平成 26 年度冬期企画展 飛鳥の考古学 2014 縄文・弥生・古墳から飛鳥へ』飛鳥資料館
- 高橋幸治 2015b 「古墳時代 島庄遺跡(2005 - 6・12 次調査)」『飛鳥資料館カタログ第 32 冊 平成 26 年度冬期企画展 飛鳥の考古学 2014 縄文・弥生・古墳から飛鳥へ』飛鳥資料館
- 高橋幸治 2015c 「古墳時代 阿部山遺跡群(2012 - 1・7 次調査)」『飛鳥資料館カタログ第 32 冊 平成 26 年度冬期企画展 飛鳥の考古学 2014 縄文・弥生・古墳から飛鳥へ』飛鳥資料館
- 高橋幸治 2016 「飛鳥の陵墓・古墳地域 阿部山遺跡群」『飛鳥史跡事典』吉川弘文館
- 露口真広 2006 「古墳時代の集落と渡来人」『奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 特別展図録 第 66 冊 海を越えたはるかな交流 - 橿原の古墳と渡来人 -』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・橿原市教委
- 勅使河原彰 2013 『考古学研究法 遺跡・遺構・遺物の見方から歴史叙述まで』新泉社
- 奈文研 1974 「小墾田宮推定地第 2 次調査」『飛鳥・藤原概報 4』
- 奈文研 1975 「和田廃寺の調査」『飛鳥・藤原概報 5』
- 奈文研 1976 「和田廃寺第 2 次調査」『飛鳥・藤原概報 6』
- 奈文研 1987 「II 飛鳥地域の調査 4 和田廃寺第 3 次調査」『飛鳥・藤原概報 17』
- 奈文研 2016 『藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡の調査 飛鳥藤原第 187 次調査現地見学会資料』
- 濱田耕作 2004 『通論考古学(新装版)』雄山閣
- 坂靖・中野咲 2016 「《研究報告》古墳時代の渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究」『平成 24 年度～平成 27 年度科学研究費助成事業 基盤研究(C) 古墳時代の渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究 研究成果報告書』
- 北條芳隆 1994 「鍬形石の型式学的研究」『考古学雑誌』79 - 4
- 北條芳隆 2014 「纏向遺跡出土の巴形石製品に接して」『纏向学研究センター紀要 纏向学研究』第 2 号
- 三浦俊明 2007 「北陸における古墳時代前期の石製品生産」『石川県立歴史博物館紀要』第 19 号
- 森岡秀人・西村歩 2006 「第 IV 部 総括 古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題 - 最新年代学を基礎として」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 森 暢郎 2014 「纏向遺跡出土の巴形石製品について」『纏向学研究センター紀要 纏向学研究』第 2 号
- 米川仁一 2014 「奈良県御所市秋津遺跡の祭祀関連遺構」『月刊 考古学ジャーナル』No.657 号

【図表出典】

第 1 図 奈良県遺跡地図を参考に、明日香村都計図をもとに筆者作成。第 2 図 村教委 2018 より引用。第 3 図 村教委 2018 より引用。第 4 図 村教委 2018 より引用。表 1 高橋 2003・2010 をもとに、その後の知見も含めて加筆・一部改変。